
バカ以上天才未満の魔術師

紀藤 柚子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカ以上天才未満の魔術師

【Nコード】

N2745S

【作者名】

紀藤 柚子

【あらすじ】

メイド「この物語は勇者様とその仲間たちが安っぽいRPGの世界を旅する話であり、バカな魔術師は飾り程度にお考え下さい」

精霊「なんでアンタがヒロインっぽく説明してんのよ！この話のヒロインはア・タ・シでしょっ！」

勇者様「まあまあ落ち着けて。とりあえずバカな魔術師に質問とスタートコールを頼むとするか。RPGとは何の略でしょう？」

魔術師「うん・・・ローリングゲーム！冒険スタート！！」

勇者様「・・・正解かどうか以前に、Pがないことに気づけよ」

バカと出会い

僕は人の行きかう道の真ん中で倒れていた。

「・・・ああ・・・」

腹が減った。

誰か僕に食べ物くれ。

「・・・うう・・・」

まったくみんな冷たいよな。

道の真ん中で、大の字で倒れている僕をチラリと見ても、

誰も手をさしのばそうとしない。

マジで餓死するって。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

僕、死ぬのかな。

すると、

サツ・・・

僕の顔は日が遮られた。誰かが僕の目の前にしゃがみ込んでいるようだ。逆光でその顔は見えない。

「・・・こんなとこで何やってんだ？」

「・・・・・・・・」

「腹減ってるのか？」

「うん！」

「・・・なんだ、元気じゃん」

「んなことないよ。何かくれよ」

「しゃーないな。そのかわり・・・」

青年は僕にパンを差し出した。こぶし程度の大きさのパンだったが、ありがたい。僕はそれをガツガツと食べた。

その青年が何を言ったのかは聞いてなかった。

「なあ」

「まだなんかあるのか？パンはもうねえぞ」

「いや違う。水くれ」

「・・・厚かましいにもほどがあるな」

これが僕と勇者様の出会いだった。

バカと勇者様

楓太と勇者様が出会って二年が経った。あれから二人は一緒に旅を続けていた。おかげで二人は信頼しあい、いい旅の仲間になっていた。

「勇者様、そろそろ休憩しましょうよ」

「バカ、まだ宿屋出してから街の外にすら出てないだろ。歩き始めて十分くらいしかたってないだろ」

「でも、もう腹ペコですよ……。なんで朝食代を払う金もないんですか!？」

「何言ってるんだ、資金の管理はお前の仕事だろうが!」

「いやゝ、魔術師って職業は出費が激しいんですよ。最新の情報とか必要ですし」

「……リュックからエロい雑誌がはみ出てるぞ」

「何!?!ちゃんとリュックの奥にしまっただけなのに!」

「……早く行くぞ」

大きく膨らんだリュックを道の真ん中に降ろしてなにやらガサゴソとやっている楓太。やれやれと首を振りながら歩き出す勇者様。楓太は真っ黒の髪であまり目立たない感じなのだが、自分の身長を超

すほどの長い木製の杖を持っているので目立つ。服装は基本質素なローブ姿。楓太の中で唯一高価に見えるのは左手の人差し指にはめた深紅の指輪だろう。それに対して勇者様は藍染のマントを羽織っていたり、髪の毛もオレンジだったり、立派な聖剣を腰に帯びていたりとかかなり目立つ背格好だった。ちなみに髪の毛は染めているのだそう。

勇者様の旅の目的はもちろん魔王を倒すこと。国王から直々に依頼されたらしい。それを果たすために魔王を探して旅をしているのだが、一向に魔王の居城が見つからない。ふつつ魔王の城というのは最初からわかっていたり、簡単に見つけられるものではないかと思っただが、魔王もバカではない。そのおかげで勇者様は魔王を探す旅を二年以上も続けているのだ。

では楓太の旅の目的とは何か。彼の目的も魔王を倒すことなのだ。これには深い事情があったりするのだが、またの機会に。

二人はやつとのこととで街の外壁までたどり着いた。この街の名は『ビッグナウォール』。巨大な外壁が外周を覆う要塞都市だ。外壁の外に出るための門にいる門番に向かって勇者様が話しかけた。

「そこのお前、魔王がどこにいるか知らないか？」

「あつ！これはこれは勇者様。申し訳ありませんが、存じ上げておりません」

「そうか」

「残念だったね、勇者様。やっぱり僕の占いで行先を決めてあげよ

うか？」

「遠慮する！お前のそれは占いは占いでも花占いだろっが！誰でもできるわ！」

「そんな。前、後ろ、前、後ろ、前・・・」

楓太が黄色い花の花弁を一枚ずつ地面に落としていく。

「前か後ろしかないのか！」

「・・・前、後ろ、前、後ろ！勇者様、行先は後ろだ！街に戻ろう！」

「はいはい。もうお前とは口をきかんかもしれない」

勇者様はあきれてしまった。首を横に振った。

「勇者様、一つだけいいですか？・・・この道をまっすぐ行った先にある街に、魔王の居城を知っているという者がいる、と噂で聞きました」

親切な門番がそう教えてくれた。どうやら行先は決まったようだ。

「この道の先は『ティータイム』とかいう街だな。・・・もう四回目だ」

二年以上旅をしている勇者様は大陸のほぼすべての街を制覇しているのだ。行ったことない場所なんてない。もはや大陸マスターだ。

「僕あの町大好きだ！お菓子がうまいし、お茶がうまいし、キレイなメイドさんがいるし・・・」

「楓太、鼻血出てるぞ」

勇者様と楓太は、要塞都市『ビッグナウォール』を出発した。

バカとメイド（１）

二人は二日かをかけて喫茶文化とヲタク文化の混在する街・『テ
イ・タイム』に到着した。町全体がレンガ造りでヨーロッパを思
い起こさせるオシャレな街だ。町全体に焼き菓子の焼けたいい香り
が漂っている。街の至る所にメイド喫茶がある。まさに夢の国だ。

「とりあえず、いろんな人に聞いて回るか。魔王の居城を知ってい
る奴がどこにいるか、をな」

「オッケー」

楓太は早速近くのメイド喫茶へ。杖はとりあえずそこら辺において
おいて、店内に入店！

カランカラン♪

「おかえりなさいませ、ご主人様」

店内には白と黒のヒラヒラした服を着た女性、メイド！またの名を
男のロマンが優雅に歩いている。

「ほ、本物だ〜♪久しぶり〜♪萌え〜♪」

この街に来るのは五カ月ぶりだ。きっと新しいメイドも増えている
ことだろう。チェックしなくては。

「すみませ〜ん。最近入った新しい子で、かわいい子いますか？」

「は、はい。あの、二か月前に入ったばかりの新人なのですが、その・・・この街のボスというか、女帝というか・・・」

「そんなすごい子がいるんですか！ぜひ会いたいです！」

楓太の頭の中はぶっ飛んだ妄想が広がっていた。しかし、目の前のメイドは言いにくそうな感じで答える。

「いや、その・・・その方はやめたほうがいいかと・・・」

「なんでですか？」

「その、とても綺麗で可愛いんですけど、性格がなんというか、変わっている、と言いますか・・・」

「いや大丈夫ですよ。僕もかなり変わってますから」

「ただだけ会いたいんだ。しかも自分で変わってるっていつちやてるし。」

「・・・わかりました。少々お待ちください」

金髪のメイドは楓太にさつと頭を下げて奥に戻っていった。いったいどんな子なんだろう。メイドの子がボスとか女帝とか言うんだからとんでもなくかわいいんだろうな・・・♪

五分ほど待つと店の奥から一人のメイドが現れた。彼女が現れただ

けで、店内の人々ははつと息をのんだ。楓太自身もすぐにこのメイドだと分かった。明らかに格が違う。オーラが違う。若葉色の長い髪は毛の先までサラサラとしていて、風のない店内でも風になびいている（いったいどうやって？）。周りのメイドとは少し違うメイド服、フリルの数が全然違うし、なんか露出が多い気がする。その青い人形のような瞳を見つめると本当に吸い込まれてしまいそうになった。

「お呼びでしょうか、ご主人様」

楓太はたじろいだ。声もかわいい。まるで小鳥が歌うようだ（古臭い表現だ）今まで会った中でダントツのメイドだ。

「あ、はい。コーヒーを一つ」

「かしこまりました」

髪をなびかせて店の奥に戻っていった。楓太はふうーっと息を吐いた。柄にもなく緊張してしまった。

バカとメイド（2）

カランカラン♪

慌ただしく誰かが店内に入ってきた。よく見ると勇者様だった。

「この店に“ストレートティー”はいるか！」

「“ストレートティー”？誰のこと？」

「この街のメイド界のボス、女帝、黒幕と呼ばれるメイドの通り名の一つだそうだ。どうやらそいつが魔王の居城の場所を知っているらしい」

「その人ってまさか・・・」

楓太が店の奥を見つめると、お盆にコーヒーを載せてさっきのメイドがやってきた。

「お待たせしました、ご主人様」

「おい、お前に頼みがある」

勇者様はメイドに言った。

「なんででしょうか？」

「俺たちを魔王の居城まで案内しろ」

「嫌です」

単刀直入に話を斬り込んだ勇者様はあっさりばっさり斬られた。やつぱりこのメイドが“ストレートティー”なのか。メイドはお盆をテーブルの上において、テーブルの上に腰かけて足を組んだ。メイドなのに・・・。

「私はメイドです。魔王なんて用はありません。勇者様がご自分でお探しになってください・・・コーヒーのお代は払って下さい。10000ベル（この世界のお金の単位。価値は円とほぼ同等）になります」

「10000ベル！？ぼったくりじゃないか！」

「私、お金が大好きなんです」

堂々とそんなことを口にするメイド。そんな金は今の二人にはない。

「払えないのなら、この店で働いてもらうしかありませんね。ちゃんと金を返すまで、魔王探しは中断ですね（笑）」

不敵に笑うメイド。確かに性格に難があるようだ。楓太は困ってしまったって何も言えないが、勇者様はそれでも笑顔だった。

「それは残念だな。楓太はここに残していても俺としてはかまわない。俺一人で魔王を見つける」

「おい！」

「そして魔王の持つ隠し財産は俺のものだ」

隠し財産という言葉にメイドは反応した。楓太は隠し財産など聞いたこともなかった。黙ってたのか？違うぞ。あの顔は、嘘だな。僕にはわかるぞ。

「隠し財産？そんなもの聞いたことないです。嘘でしょう？」

「ああ、嘘かもしれないが、本当かもしれないな。魔王ってほどだから相当なもんを貯めこんでるって噂だ。お前が来ないんなら、すべて俺のものだ」

「僕の分は！？」

「・・・わかりました。国民の方々の平和のためならば、私は全力で隠し財・・・勇者様をお助けして魔王を倒しましょう」

メイドは勇者様にこうべを垂れた。

「絶対嘘だね！！完全に隠し財産目的じゃないか！！」

楓太が指摘したが、目がうつとりしたメイドの耳には届いていない。おおかた隠し財産の使い道でも考えているのだろう。

「よーし決まりだ。俺たちを魔王のどこまで案内してくれ」

「わかりました、ご主人様」

「その前に、お前、なんて名前？」

「私ですか。ミントと言います。お見知りおきを」

ミントは店の奥に戻って旅の準備を始めた。楓太は複雑な顔で勇者様に向き直った。

「隠し財産なんて嘘だろう？バレたらどうすんだよ？」

「所詮メイドだ。魔王の居城だけわかればいつでもトンスラできるだろう？」

勇者様御一行にメイドのミントが加わった。

バカと精霊（1）

勇者様・楓太・ミントの三人は旅をしていた。一行の行先を決めるのはミント。彼女が魔王の居城の場所を知っているというのだ。

「『サビレータマーチ』に行くのか？あそこに城なんてないだろう？しかも王都のお隣さんじゃないか。そんなところに魔王の居城があるのかよ」

「あります。王都の隣？だからこそ、いつでも攻めることができるのです」

『サビレータマーチ』という街は本当にさびれた街で、人口もわずか、それも年寄りばかり。家と言ってもみんな小屋のようなものばかりの街なのだ。

「あそこコンビニないもんな」

「この世界にコンビニなんてあるか！」

楓太と勇者様はもともとこの世界の住人ではない。楓太は三年ほど前に、勇者様その半年後にこの世界にやってきた。二人は元いた世界からこの世界に召喚されたのだ。楓太はそのまま一年ほど放浪の旅をし行き倒れ、勇者様はその行き倒れた楓太を発見した。

『サビレータマーチ』まではかなりの距離がある。歩いて三週間はかかるだろう。しかし、そこにいるであろう魔王を倒せば勇者様た

ちの旅は終わる。そう思うとたいした距離ではない。

「勇者様、どうして草むらを避けているのですか？」

草原を歩いていた一行。草むらを必要以上に避ける勇者様に対して不審に思ったミントが尋ねた。

「草むらを歩くと、雑魚の敵が出てくるからな。そんな奴らといちいち戦ってたらきりが無い。だから避けてるんだ」

「だから僕たち所持金が少ないんだよ！雑魚でもなんでも倒して金を稼がないと次の街は野宿だよ！」

「ならお前が戦えよな」

「ギクッ!!」

ほとんど戦闘経験のない楓太。いつも持ち歩いている木製の杖を使ったのは片手で数えるほどしかない。

「私、魔法使つてること見てみたいです」

ミントはそう言ったが、目が完全に悪者の目だ。二人とも絶対悪ノリでそんなこと言ってる。

「決まりな。ちゃんと楓太が戦えよ」

そう言っただけなのにニヤけた勇者様は草むらにチョイッと足を踏み入れた。

ガサガサッ！

ゴブリン×3が現れた！

「ホントにやったな！？勇者様が戦ってよ！」

慌てた楓太が勇者様に頼んだ。

「俺のこの聖剣は、魔王と戦う時まで使わない約束だからな」

そう言って腰の聖剣を握りしめる。

「ミ、ミント・・・！」

「私はメイドですので」

ミントもはつきりと断る。

「楓太、お前はすごい魔術師だ。お前ならあのゴブリンくらい楽勝だろう？」

「ま、まあね！しかたがい、僕の本気を見せてやろう」

楓太は杖を構えて、ゴブリン×3の前に躍り出た。

バカと精霊（2）

「なんだこいつ、魔術師か？その割にはやけに頭悪そうだな」

ゴブリンのうち一人が呟いた。

「見た目で決めつけるなよ！人間、中身が大事なんだぞ」

「その中身がバカなんだろうが」

「勇者様ひどい！」

そんなやり取りを見ていたゴ布林たちはイライラしだした。楓太に飛びかかったのだ。

「うわっ！・・・しかたがないな、僕の力を見せてやるよ」

楓太は杖の先をゴ布林たちに向けて呪文を唱えた。

「ファイア！」

杖の先から真っ赤な炎の塊が飛び出してゴ布林を襲う。ゴ布林たちは火に包まれた。

「ギヤアー・・・こんなもんか？」

ゴ布林たちはたいして熱くもなさそうだ。なんせ敵も終盤なのでなかなか手ごわい。下級魔法ではどうにもならないのだ。微々た

るダメージ。

「そんな僕の魔法が効かないなんて!」

「杖も魔法もしょぼすぎるんだよ」

「勇者様が自分の装備ばかり買って、僕の装備は買ってくれないからでしょ!僕の杖も鎧も全部初期装備のままだよ!」

「レベルも低いしな」

「ゴブリンにも苦戦するなんて・・・悔しい!」

「ミント、先行くぞ」

勇者様がミントに言った。じっと楓太を見据えたままだ。

「えっ、楓太さんを置いて行ってもよろしいのですか?」

「ああ、あいつなら大丈夫だ。・・・正確には、あいつの仲間任せれば大丈夫だ」

「仲間、ですか?」

「そうだ。危ないから先行くぞ」

少し不安げなミントを連れて勇者様は草原を進む。楓太を残して。楓太は静かに左手を前に突き出した。左手の人差し指にはめられた深紅の指輪を。

「・・・久しぶりだな、彼女を呼ぶのは。火傷するからあまり呼びたくはなかったんだがな」

楓太は薄く笑った。ゴブリンの一匹はその指輪が何かに気が付いたようだ。

「そ、それは、召喚の指輪！？　いったい何を呼び出す気だ！」

召喚の指輪とは文字通りモンスターを召喚する指輪なのだ。大した魔力も必要とせずモンスターを呼び出せるので人気がありそうだが、実際たいして需要はない。自分で魔方阵を描いて召喚するのは違って、モンスターに何の拘束も枷もないので素直にいう事を聞かなかったりするのだ。場合によっては召喚者を襲うこともある。しかも、この指輪を作るのには高度な技術と希少な材料が必要なので数はあまり多くない。所持している者は数少ない。楓太は放浪の旅をしている時に、ある魔術師から譲り受けたのだ。その人物が楓太に魔術を教えたのだ。

「よく知ってるな。召喚！出でよ、イフリート！！」

光輝いた真紅の指輪から一筋の光が飛び出した。その光は大きく弧を描いて地面に突き刺さり、光の魔方阵を描く。その魔方阵から一人の悪魔が現れた。それは女性の姿をしており、ところどころに燃えるような赤い毛が生えている。背中にはあからさまに小悪魔と言えるような深紅の羽が生えており、頭には小さな角が生えている。極めつけは真っ赤な尻尾。耳が長く、牙もあるが、トータルで見ると人間に近い。

「あら楓太、久しぶりねえ」

彼女は楓太のほうを向いて親しげに手を振ってきた。

「ルビー、今日はやけに機嫌がいいな。なんかあったのか？」

「ヒ・ミ・ツ」

楓太がゴブリンたちを指さした。

「あいつらを頼む」

「しょうがないわね。ホント 안타って弱いわね」

「うるさい！余計なお世話だ」

イフリートのルビーはゴブリンたちのほうにさつと手を振った。すると突如炎が現れゴブリンたちを飲み込んだ。さっきの楓太の魔法とは格が違う。ゴブリンたちが何か言う前に灰になってしまった。その炎は止まらず、楓太たちにまで襲い掛かった。

「あつっ！こつちにはやるなよ！」

「アタシ、熱くないし」

「主人が灰になってもいいのか！」

「別にいいわ」

「おい！」

楓太は軽い全身やけどを負った。全身を焼かれた時点で軽くはない

のだが。ルビーは楓太に向き直った。

「アンタまだあのこと勇者に話してないの？」

「何が」

「アンタも勇者だってことよ」

「話してないよ」

ルビーの言うとおり、フウタも実は勇者だったのだ。そう、だった。三年前、楓太は勇者としてこの世界に呼び出された。呼び出したのは城に住む巫女だった。その巫女は「あなたは勇者様です。魔王を倒してください」と楓太に言った。それに対して楓太は「わかった。僕が魔王を倒してくるからね」とか安請け合いをして城を飛び出したのだ。その後楓太の消息は途絶え、楓太は死んだと考えた巫女が、半年後に二人目の勇者を呼び出した。それが今の勇者様。楓太はすぐに城を飛び出してしまったので、あまり勇者様は詳しくは話してくれないが、どうやら勇者様は楓太のようにならないようかなり厳しく特訓をされたらしい。召喚されて三か月の間、城から出ることはできず、日々剣術の稽古。ずっと勇者様勇者様と呼ばれていたせいで、自分の本当の名前を忘れてしまったらしい。

だから楓太は勇者様の旅に同行しているのだ。自分のせいでここに呼ばれてしまった勇者様を助け、魔王を倒すことが楓太の目的なのだ。そうすれば、楓太も元の世界に還してもらえるかもしれない。

「いつまで黙ってる気なのよ」

「ずっと、かな」

バカな魔術師はしばらくその場で空を眺めていた。

バカと二セ勇者

三人は『サビレータマーチ』に行く途中にある小さな荒れ地の街に立ち寄っていた。街の名は『スモールムーラ』。この街に長居をする気はなく、すでに三人は街を出るところであった。

「楓太ー、早くしろよ」

「置いていきますよー」

勇者様とミントはすでに町を出る準備万端なので、楓太がアイテム屋を出るのを待っていた。

「待つてよ！アイテムとか補充しないと！これから魔王と戦うのに・
・ホント危機感のない奴らだな。僕がしっかりしないと！」

そう心に誓った楓太はアイテム屋の店主とにらめっこだ。

「ハイポーションか・・高いな。一個も買えないよ。ポーションならかるうじて余った金で買えるな。おじさん、一つください」

「はいよ、まいどあり♪」

これで所持金ゼロだな、とか思いながら店を出た楓太はポーションの小瓶を片手にあることに気が付いた。

「あつ、ポーション入れる袋がなかった。このままリュックに入れて万が一中身がこぼれちゃったら・・・お代が無駄になるし、リュ

ツクの中が臭くなるよな」

そこかよ。

「しかたない。慎重にしよう」

楓太は慎重にリュックの中にポーションの小瓶を詰めると、タオルで小瓶が動かないように固定した。そして勇者様たちに追いついた。

三人が街を出ると荒れ果て乾いた大地が延々と続いていた。

「ここを後二日も進むのかよ」

「つらいなー・・・」

「ご主人様、元気を出して下さい」

「勇者様だけじゃなくて僕も励ましてよ！」

そんないつもの暑苦しい会話をしながら歩いていると、後方から勢いよく追いかけてくる奴らがいた。人数は四人。

「なんだあいつら？」

三人が振り返るとその四人組は楓太達の前で止まった。砂埃が舞って顔がよくわからない。

「お前が勇者を語っているという悪党か!？」

戦闘に立って走っていた金髪の青年が勇者様に言った。

「は？なんのことだよ。俺は本物の勇者だ」

「やっぱり悪党か！本物の勇者はこの俺だ！」

金髪が自分自身を自慢げに指差す。金髪の横の三人もうなずいた。勇者様は不満げに言う。

「勇者の名前を語る奴なんてたくさんいるだろうけど、それをわざわざわざわざ本人に言うなんて、よっぽどのバカだな」

「バカ呼ばわりするな！俺は賢い！」

自慢げに自分自身を指さす。

「やっぱりバカじゃん」

「なんだとー！・・・よおーっし、こうなったら俺たちと勝負しろ！勝ったほうが本物の勇者、負けたほうがニセモノだ！潔く身を引け！」

「なるほど、それが目的ってわけか」

「勇者様、どういうこと？」

楓太には理解ができない。

「だから、ここで俺たちを倒しちゃえば堂々と勇者面ができるって

わけよ。俺たちが身を引くことになるわけだからな」

「どうした、怖いのか？逃げるのか？」

「そのあからさまな誘い方、やっぱバカだな。いいぜ、その勝負受けてやる」

「ご主人様、よろしいのですか？」

「ああ。こんなバカに負けるわけないしな。魔王戦前のいい腕試しだ」

勇者様は指をポキポキと鳴らした。

「勝負は三本勝負！先に二勝したほうの勝ちだ」

「いいぜ。順番を決めよう」

勇者様は手招きして楓太とミントと頭を寄せる。

「・・・三本勝負ってどうすんだよ？僕と勇者様はともかく、ミントはメイドだぞ？戦えるわけないじゃん」

「わかってる。俺とお前が勝てばすむ話だ。それにミントも、だてに女帝やってたわけじゃないだろうしな」

「はい。お任せ下さい」

「でも・・・」

「先鋒は楓太、お前が行け。お前なら必ず勝てると信じてるぞ」

「勇者様・・・」

変な勇者御一行との“勇者”の称号を賭けた三本勝負が始まった。

バカと水の魔術師

楓太が前に進み出ると、ニセ勇者一行からも魔術師らしき女が進み出た。女は楓太とは比べ物にならないくらい高級そうな純白の杖を持っていた。海を思わせる青色の髪は肩にとどくほどのショートボブで、ゆったりとした白いローブを着ている。くたびれた茶色のローブを着て木製の杖を持った楓太とはずいぶんな差がある。

「クラスAの水の魔術師、アクアといいます。よろしく願いします」

アクアは丁寧に楓太に頭を下げる。

「クラスAだと・・・！？僕の師匠ですらクラスCだったのに」

「ふつう師匠つてめっちゃ強いっていうのが王道だと思うんだけど・・・やっぱバカの師匠もバカだったのか」

勇者様はそんなことをつぶやいた。

「クラスEの炎の魔術師、勇者様の右腕、楓太だ！」

「クラスEだと？笑わせやがる。うちのアクアの圧勝だな」

向こうのニセ勇者はへらへら笑っている。だが、勇者様も余裕の笑みだ。

「楓太は大丈夫でしょうか？」

「ああ。あいつはバカだがあいつには頼りになる精霊がいるからな。イフリートはレベル5のモンスターだからな。クラスAじゃ同等くらいだ。勝負はわからない」

楓太とアクアが杖を構えた向き合う。バトル開始だ。

「ファイア！」

先手は楓太だ。下級魔法でアクアの出方をうかがう。アクアは澄ました顔で杖を楓太に向けて呪文を唱える。

「ブルネングレーサー！」

杖先からほとばしる煌めく水の奔流が楓太のちっぽけな魔法を飲み込んで楓太に襲い掛かる。

「うつそー！？」

為す術もなく楓太は本流に飲み込まれ上空に打ち上げられる。

ドサッ！

楓太は無様に地面に叩きつけられた。アクアは微笑んでいる。

「この程度ですか？勇者の仲間の魔術師というのは果たす役割も多いものです。あなたの腕でそれが務まるとは思えませんか？」

「・・・ハハハッ！今のは君の実力を見たにすぎない。僕の本気を見て腰を抜かすなよ！・・・召喚！」

楓太が真紅の指輪を前に突き出すと光が飛び出し、イフリートのルビーが現れた。

「アタシを呼んだ〜？」

「イフリートだと！？そんなモンスターの召喚の指輪を持ってるのか！？」

向こうの盗賊が驚愕の表情を浮かべている。楓太はにやりと笑う。

「さあルビー、僕たちの本気見せてやろうぜ！」

「ボクたちっていうか、アタシだけけどね」

ルビーもにやりと笑う。掌に炎を集める。

「燃えちまいな！」

ルビーの放った炎は瞬く間にアクアを囲み襲い掛かる。しかし、アクアは憐みのような表情を浮かべて呪文を唱える。

「・・・ブルネングレーサー！」

水の奔流はルビーの炎さえも飲み込みその勢いのまま楓太とルビーを巻き込み上空に打ち上げる。

「「ギヤアアアーーーー！！」」

ドサッ！ドサッ！

地面に叩きつけられた楓太とルビーは伸びてしまった。アクアはため息をついた。

「水と炎じゃ完全に相性が悪いのに。正面からぶつかったら水が負けるわけないわ」

水の魔術師・アクアの勝利。

「ゴメン勇者様！」

「まったく相性とか考えないなんてやっぱバカだな。決めた、これからはあのアクアと旅をしよう。かわいいし頭もいいし」

「ちょっと勇者様……!!」

先鋒戦を落とした勇者様側は後がなくなった。中堅にはミントが行くことになった。

「私でよろしいのですか？」

「大丈夫。お前が強いのは俺にはお見通しだ。『ティータイム』で噂はたくさん聞いたからな。あとお前には頼みがある」

そう言つて勇者様はミントになにやらを渡して耳元で何かつぶやいた。

「わかりましたご主人様」

ミントは進み出た。楓太がリュックの中をガサゴソしながらつぶやく。

「あゝあ、ポーションがこぼれちゃったよ。リュックの中臭くなっちゃった」

「お前は黙ってる!」

メイドと盗賊

ミントが進み出ると向こうからは盗賊の青年が前に出た。薄汚れた髪と服装だが、目だけは爛々と輝いていた。

「メイドさんが相手かよ。本気出しづらいな」

そう言いながら盗賊はナイフをジャグリングしている。

「盗賊・ジャック。よろしく」

「ご主人様だけのメイド・ミントと言います。よろしく願いします」

ジャックがミントを威嚇するように睨むが、ミントはさらっとその視線を受け流す。中堅戦のスタートだ。

ジャックがすかさず地を蹴る。両手に持ったナイフが怪しく光る。ナイフでミントに斬りかかる。

「真っ赤な花を咲かせちまいな！」

「……………」

ミントは地にしゃがみ込んでナイフをかわす。地に手をついたまま

後ろに二歩下がる。そしてジャックを見る。

「よくかわしたなあ。だが、今度はどうかな？」

ジャックはミントに何度も斬りかかる。ミントはそれをただかわす。何度もすれすれを斬られる時があった。ミントの額には汗がじわつと浮かんでいた。

「ミント、すごい・・・」

「ああ。さすがメイドの中のメイドだな」

ジャックからいったん距離を取ったミント。すかさずジャックがナイフをミントに投げる。ミントは瞬時にしゃがんだがナイフが耳元をかすめていった。

「・・・そろそろいいですかね」

そう言つて立ち上がるミント。あくまでもその目は冷静だ。

「なんだ、まだ余裕があるのか。じゃあ、これで終いだぜ」

ジャックがナイフを振り回しながらミントに斬りかかる。今度はミントは動かない。

「・・・遅いです」

ミントはジャックの懐に入り込んだ。ジャックのナイフを巧みにかわしながら。そのままから空きのジャックの腹にストレートをぶち込んだ。

ドスッ！！

「ぐへっ・・・！」

ジャックは白目をむいて倒れてしまった。ミントは涼しい顔のままだ。

メイド・ミントの勝利。

「さすが“ストレートティー”と言われていただけのことはあるな」

「“ストレート”ってその、パンチのほうのストレートだったの！？」

「お役にたててうれしいです」

「これで一対一だね。勝つも負けるも勇者様次第だ」

「やっぱバカだな。俺が負けるわけないだろ」

勇者様はニセ勇者を睨んだ。ニセ勇者も勇者様を睨み返した。

勇者様と二セ勇者

「むしろこの方がいい。はっきりさせようぜ。どっちが本物の勇者かってことを」

二セ勇者が偉そうに言った。

「まあ本物は俺なんだがな」

勇者様もかなり強気だ。

「勇者、レオ！」

「おなじく勇者。名前はねえ」

勇者様には名前がない。というか忘れてしまった。

勇者の称号を賭けた対決もついに最終戦を迎えた。

「聖なる剣を受けてみよ！」

レオは腰の剣を抜いた。太陽光を反射し、鋭利な刃を勇者様に見せつける。

「俺は剣を抜かねえ。こいつはまだ、抜くわけにはいかねえんだ」

勇者様がこちらの世界に来て王城で訓練を受けている時に、姫からこの聖剣を授かったのだ。姫は渡す時に、「……さん、この聖剣を貴方に渡します。この聖剣で必ず魔王を倒して下さい」と言った。何と呼ばれたのかは覚えていない。勇者様は「オッケー」と言った。姫は「この聖剣は魔王と戦う時まで使わないで下さい。抜かないで下さい」と言った。「なぜ？」と勇者様が問うと、「これは魔王を倒すための特別な力を持っているからです」と言った。だから勇者様はこれまで一度もこの聖剣を抜いたことはない。

「そうか。ならあんたの旅はここで終わらせてやるよ！」

レオが勇者の剣を構えて勇者様に斬りかかる。勇者様はポケットから小さな青いスイッチを取り出した。

ポチッ

……ドドドドッカーン……！！

レオの足元に仕掛けられていた小型の爆弾が一斉に爆発した。

勇者様の勝利。

「レオー！大丈夫か！？」

「生きてますか！？」

「神のご加護があるんことを！」

レオの仲間のジャックとアクアと聖職者のホワイトが倒れて真っ黒焦げのレオに駆け寄る。レオはゲホゲホツと咳き込んでいたが生きていた。勇者様は涼しい顔をして楓太とハイタッチをかわした。

「ゲホゲホツ！・・・爆弾だと・・・！？いったいいつ・・・？」

レオは少しだけ顔を上げて勇者様を睨む。

「うちのメイドさんがなんであんなに逃げ回っていたと思う？なんでしょっちゅうしゃがんでたと思う？」

勇者様が簡単なことじゃないかという感じで説明する。

「メイドが逃げ回っていたのは爆弾を設置するため！だからかわす度にしゃがんでいた、爆弾を埋めるために！」

ジャックがようやくそのことを理解した。ミントはメイド服の袖口をひらひらさせている。その袖の中に小型爆弾を隠していたのだろう。

「戦いの前にご主人様から受け取りました」

「ま、俺たちの作戦勝ちだな。魔王倒すには頭も必要だったことだ」

勇者様は頭を指さす。楓太は笑いが止まらず、ジャックをイライラさせていたが文句は言ってこなかった。傷ついたレオをジャックとホワイトが抱えて立ち上がった。レオの剣はアクアが持っていた。

「ゲホゲホツ・・・今回は俺たちの負けだ。だが、次はこうはいかんぞ・・・！」

「セ勇者一行は荒れ地のかなたに去っていった。

「なんか恐ろしい敵ができたかもな」

「あいつらが魔王倒しちまえば楽なんだがな。勇者を名乗るのは勘弁してほしいぜ」

勇者様がぼやいた。ミントはフフツと笑った。

「さあ、もうすぐ魔王の居城に着きますよ。ちゃちゃっと倒して財宝を奪還しましょう」

「ミントは相変わらずだな。でももう魔王戦か。長かったな」

楓太は勇者様と旅した記憶を思い起こして懐かしく思った。

バカと魔王

勇者様御一行は、王都のすぐ隣にある街・『サビレータマーチ』に到着した。ミントの情報によるとここに魔王の居城があるらしい。街の様子は普段と変わらずほとんど人がいない。

「街ってというか、村って感じだな」

「この街の地下に魔王はいます」

ミントは街のはずれにある小さなぼろい小屋に案内した。勇者様と楓太とミントが入っただけでほとんど中がいつぱいになってしまいうような小さな小屋だ。

「この小屋はなんなんだ？」

「この小屋のどこかに、地下に続く通路があるはずですよ」

「お前やたら詳しいな。どこでその情報手に入れたんだ？」

「街に来た占い師さんに聞きました」

「占いかよー！」

勇者様は深くため息をついた。占いで行先を決めるってなかなか勇者っぽいけど、悪く言えばバカだよな……。

楓太がテーブルの下をがそこそやっていると、隠し扉を見つけた。

「この先に魔王がいるのか・・・」

「嫌がらせで、ここから大量のポーションを流し込むってというのは？臭いし溺れるしいい作戦だと思うよ」

楓太の驚くべき発言。バカの極みだな。

「オレらにそんな金はねえ！それにほかにも抜け道があるに決まってるんだろ！・・・ホントバカだな！」

「いい作戦だと思ったのになあ」

楓太の頭がひねり出した最高の作戦は勇者様に軽くひねりつぶされた。

「さあ、早く財宝を奪いましょう」

ミントはもう完全に財宝狙う気満々だし。勇者という名を振りかざした強盗だな。そうとう性質が悪い。

またまた深いため息をついた勇者様に続いて一行は魔王の地下の居城に潜入した。

暗い通路が続く魔王の居城。雰囲気もそれっぽいわりになっていて、明かりと言えば松明の明かりくらいしかない。

魔王の居城というだけあって勇者様の行く手には数々のモンスター

が襲いかかってきた。

「正義の鉄槌！」

カッコよく技の名前を叫ぶ勇者様だが、実際は火をつけた爆弾を敵に投げつけるだけなのだ。

ドドドーン！

敵に反撃の隙を、勇者様に触れる隙さえも与えない。

正義とは名ばかりの狡猾な攻撃だ。

爆煙がはれると三人の前に立っているモンスターはいなかった。勇者様が特別に改良した超威力の爆弾。地下通路が崩れてしまうのではないかと楓太は心配した。

「魔王は近い、かな」

そんなことを言う勇者様の目は笑ってはいなかった。いくらモンスターとはいえ爆撃するのは心良いことではないだろう。ミントは無表情だった。楓太は真っ直ぐに通路の先を見つめていた。

「勇者様、行こう」

「ああ」

三人は物音を極力たてないようにしながらさらに先に進んだ。しばらく進むと少し開けた空間にたどり着いた。その部屋はひととき明るく、中央には何か大きな影が見えた。

ついに勇者様は、魔王と会い対峙した。

魔王、第一印象はそんな感じだった。

漆黒の身体は筋骨隆々で常人の五倍もの大きさだった。その大きな背にはドラゴンを連想させる野性的な翼が生えていたし、少し含み笑いをしているような口元からは牙が覗いていた。

「来たか、勇者。ここに来るまでにずいぶん多くの魔物たちを斬り捨ててくれたな」

「正確には斬ってないがな。爆破だ」

そんな訂正どうでもいいだろ。勇者様は魔王の目前に堂々と立ち、魔王の顔を見上げていた。

「俺はお前を倒さなきゃならねえ。悪く思っなよ。人間を襲ったツケだと思え」

「弁解するつもりはない」

勇者様は旅の中で初めて腰の聖剣の柄に手をかけた。

「マジであんなのと戦うつもりかよ・・・」

楓太は物怖じしていた。だってまだ初期装備だぜ？

「・・・まあ落ち着け勇者よ。我は貴様と争うつもりはない」

魔王が言った。勇者様が怪訝そうな表情をする。ミントもいぶかしげな表情をしていたが、楓太だけは違う。魔王と戦わなくていいのか？ヨツシャー！平和最高！

「我が配下の魔物たちが人間を襲ったことは謝る。すべて我の教育不足だ。だが許してくれ。これからは人間を襲わないようにさせる。我は争いを望んではない」

なんか拍子抜けだな。魔王がやけに弱気な発言だ。勇者様は納得がいかないらしく魔王に食い下がる。

「なぜだ？お前たちの目的は人間界を征服することじゃないのか？俺も王都も力で潰せばいいんじゃないのか？」

なんだこの状況？勇者様が魔王に王都を襲うように説得している・・・？

「我は愚か者ではない。勇者と戦って勝てるとは思っていない。万が一我が負ければ魔物たちは王国軍によって一掃される。一族の長としてそんなわけにはいかない。魔物を守るためには降伏するしかないのだ」

物わかりのいい魔王。こんなRPGは興ざめだな。だが勇者様は魔王のその言葉で納得したらしかった。

「賢い魔王だ。王都の連中には俺から話を通しておこう」

「すまない。助かる」

こつして魔王との戦い（？）は終わったのだった。

バカと王国（１）

三人は帰路についていた。迷路のような通路だったが魔王の使いが小屋の出口まで案内してくれたので迷うことなく外に出ることができた。魔王のもとを去る時には魔王の子供というモンスターが勇者様に笑顔で手を振っていた。勇者様も笑顔で手を振りかえした。あんな可愛くて優しいような子供がいる魔王を倒すなんてことができるわけがない。これから幸せに暮らしてほしいと思う。楓太もミントも手を振った。ミントまでご機嫌な理由とは、帰り際に魔王から宝石の詰まった麻袋を受け取ったからだ。ミントはその大きくて重い袋を肩から担いでいる。

小屋の中は手狭だったので、三人は魔王の使いに礼を言って小屋を出た。

「魔王さんってなんて素敵な方なんでしょう！」

「ミントご機嫌だな」

財宝が嘘だったことがバレてたら、楓太と勇者様の命はなかったな。魔王に命を救われたって感じた。勇者様は大きく伸びをした。

「さあ、王都に戻ろう。さっさと魔王のこと話さ・・・」

勇者様は言葉を切った。ある一方向を見たまま。楓太とミントもつられてその方向を見た。

街のはずれにあるこの小屋。その前に広がる草原。

その草原を埋め尽くすおびただしいニンゲン。

数千の軍勢で押し寄せた王国軍だった。

「なんだよあれ・・・」

勇者様は言葉を失った。魔王退治は勇者に任せたとばかり思っていた。

「急いで訳話したほうがよくないか？じゃないと魔王の城を攻撃するかもしれないぞ」

楓太が勇者様に言う。その通りだ。三人は王国軍と話をつけに行った。

王国軍は草原を埋め尽くしていた。太陽の光を受けてキラキラと光る甲冑。ガチャガチャと音を立てながら行進する兵士たち。明らかに臨戦態勢って感じた。勇者様はその軍隊の將軍の前に通させた。

「勇者様！ご無事でしたか！」

そう言っつてうれしそうな顔をする將軍だったが、目は笑っていない。心から思っているわけではなさそうだ。

「將軍殿のお耳に入れておきたいことがあります」

「ほう、何かな」

勇者様は膝をついて將軍に敬意を示している。したがって勇者様は將軍の顔を見てはいない。楓太とミントは勇者様の横で同じように膝をついているが、顔は上げたままだ。

「私は今、魔王に会ってきました。もちろん国王や王女様の願い通りに討伐しようとしたが、魔王が心から詫びて、もう人間には二度と手を出さないといったので許してきてやったところでございます」

「なるほど、それで？」

將軍の言葉は驚くほど冷たかった。勇者様は言葉をつなげる。

「そういうわけで、これからはモンスターの脅威に恐怖することもないわけで、つまり、このような出兵はまったくもって無駄であるわけで」

勇者様は少し將軍を小ばかにしたような言い方をした。

「それで勇者様は魔王の言う事を真に受けてしまったわけですか？ そんな明らかなウソに騙されて魔王に刃を向けようとしたわけですか？」

將軍は怒っていた。怒りで口元のひげが震えていた。

「ああそれならば、我らがここに来たのは間違いではなかったのだ。我々は勇者様がいくら待っても魔王討伐に行かないので、我ら独自で魔王の討伐隊を編成した。しかし、我らも魔王の居城を特定するに至らず、魔王討伐隊は一年もの間出番がなかったのだ」

將軍は悲しそうな表情をする。どうやら気性の激しい人のようだ。

「ひと月前、勇者様は魔王の居城を見つけそこに向かったという情報を得た時、我らがどれほど喜びに打ち震えたか！我らは勇者様に手を貸そう、勇者様のお力になろうと思いいここに至った次第なのだ」

將軍はうれしそうな表情を浮かべる。

「だがしかし、ああなんということだ。勇者様は魔王に情けをかけようとしていらっしゃる！それではいけないのです。魔王はまた必ず民を襲います！魔王は倒すべき存在なのです！」

將軍は再び起こった表情を浮かべ勇者様を睨む。

「『『『魔王を殺せー！！』』』」

周りにいた兵士たちが叫ぶ。とたんに辺りは口々に叫びだした。

「『『『魔王を殺せ！魔王を殺せ！』』』」

楓太もミントも困惑した表情を浮かべる。だが勇者様は平静を取り戻していた。

「將軍殿、私からのお願いです。魔王たちをそつとしておいてあげてください」

「勇者様、それは聞けぬ相談だ。我らは今日、勇者様に代わって魔王を殺す。・・・すでに先鋒部隊を城内に送り込んでいる」

「なんだって!？」

楓太は叫んだ。早く止めないと魔王が！

「楓太、ミント、魔王のほうを頼む。俺がここを受け持つ」

勇者様はそう言った。どうやら將軍たちのやり方が気に入らなかったようだ。

「話長ったんだよな。勇者様、その將軍ボコツといてね！」

そう言い残して楓太とミントは再び魔王の城内に突入した。後に残った勇者様は王国軍全体を見渡す。將軍が一步前に出て、剣を抜いて勇者様に向ける。

「勇者様、我らの邪魔をするというのなら死んでもらいますぞ。王国の意思に背く勇者など、求めてはいない」

「なら勇者なんて、こっちから願い下げだ」

勇者様は凄絶に笑った。

バカと王国（２）

楓太とミントはまたしても魔王の地下居城の内部に潜入することになった。だが、先ほどとは目的が真逆。魔王を助けるために向かったのだ。そんな二人を見送った勇者様は改めて將軍率いる王国軍の大軍勢を見渡した。

「たいそうな数だな・・・」

楓太には、ここは俺が受け持つ、なんてカッコイイことを言ってしまったが、いささか無理があったような気がしてならない。それでも勇者様は聖劍の柄に手を当てて將軍を睨む。

「勇者様、行きますぞ！」

戦闘きつて斬りかかってきたのはほかでもない將軍。勇者様は初めて、聖劍を、抜いた。

カチカチカチカチ・・・

聖劍から何やら機械仕掛けのような音がする。とりあえず勇者様は將軍の一太刀をかわして聖劍を眺める。

「なんだ、この音は？これじゃまるで・・・」

そう呟いている途中で意図を解した勇者様は、何を思ったか聖劍を鞘ごと王国軍の連中に向かって放り投げた。その先には將軍もいる。

「どうしたんだ勇者様は！？なぜ武器を捨てるのか！」

將軍は訳が分からないという表情だったが、自らのほうに向かってくる聖剣を見てはっと気が付いたようだ。

「全員退避せよー！！」

將軍の叫びで混乱する王国軍兵士たち。勇者様はすでに地に伏せて身構えていた。

ドッカーーーーーン！！！！

王国軍隊のど真ん中に落ちた聖剣と鞘は爆発してその周囲を吹き飛ばした。

「ひどいことするよな、姫様……」

土埃の立つ中で地面に伏せていた勇者様だけが立ち上がった。

楓太とミントは地下の居城を進んでいた。一度通った道なので割とすんなりだったし、邪魔をしてくるモンスターがいない。既に中は壊滅状態だった。

「先鋒部隊の仕業か……！」

唇を噛む楓太。急がないと間に合わない。楓太の脳裏には魔王とその息子の姿が浮かんでいた。ミントは何もしゃべらない。財宝の詰まった麻袋を担いだまま驚くほどのスピードだった。財宝を置いて

おけばもつと速く走れるのではないかと思ったが、ミントがそんなことするわけがない。

二人が魔王のいる地下最深部に到着した。

そこには、

地面にうずくまって

泣きじゃくる魔王の息子と、

血に染まった刃に貫かれている

雄々しき魔王の姿が

あった。

「魔王！」

楓太が駆け寄ろうとするがミントに制止される。魔王に突き立てた刃を引き抜いた先鋒部隊の一人。ここにはそいつしかいない。最深部までたどり着いたのはこいつ一人だったというわけか。そいつは地に染まった剣を一払いして血を払拭しようとした。そして楓太達を見た。

「誰かと思えば、とつくに死んだものと思っていた、一人目の勇者じゃないですか」

その男はさして驚いたふうもなくそう言った。ミントは訳が分からないといった表情だったが、楓太と真剣な顔を見てしゃべらないほうがよさそうだと判断したようだ。

「お前・・・王子様、なのか？」

楓太はその男に向かってそう言った。先鋒部隊のその一人は、この王国唯一の王子だったのだ。王子は少し汗をかいたらしくうっとしげに金色の髪を掻き揚げた。

「魔王は私が倒した。これであなたたち、一人目と二人目の勇者の出番は終わりですね。私が英雄として名を挙げた。そう、私が英雄だ」

「そんなことどうでもいい！英雄とか！・・・魔王は優しい奴だった！もう人間を襲わないと誓っていたのに、僕たちには攻撃する理由はなかったのに！・・・どうして・・・」

「魔王の部下たちが今まで何をしてきたか忘れたのかい？謝ったらそれで許せてしまうのかい？」

「・・・僕は、許せる。魔王を信じたい、魔王にチャンスを与えたかったんだ」

「チャンスをおげたい？何様のつもりだ。やはりあなたはバカだな。魔王は魔王。私が自らとどめを刺してやろう」

王子剣を構えて倒れこんでいる魔王の心臓に狙いを・・・

「やめろ！」

楓太は杖の先で王子を殴った。自分が魔術師であるとか、相手が王子であるとか考えずに。

「クツ・・・！貴様・・・！？」

「僕はお前を許さない！・・・召喚！」

楓太の真紅の指輪から呼び出されたイフリートのルビー。そのまま勢いに乗って炎を王子に向けて繰り出す。

「やめろー！！」

王子を包み込む真つ赤な炎。それはまるで跳ね上がる鮮血の飛沫のようで、慟哭する王子の身体を無残に取り崩していくのだった。

バカと姫様（１）

一連の戦いを終えた勇者様・楓太・ミントは王都の牢獄内にいた。もちろん罪状は王子殺害。冷たい岩肌に囲まれて薄暗い牢の中は松明の明かりだけが生き生きとしていた。

「・・・勇者様、ゴメン」

何度も呟いたセリフをまた、楓太は小さく呟いた。

「まったくだぜ。俺に任せておけば事故に装って一件落着だったのにな」

勇者様は飄々と言つてのける。勇者様もミントも、内心王子を許していなかった。だからこそ楓太を責めるようなことは言わなかった。

「勇者様、あの大軍を一人でどうやったのさ？」

あの時、勇者様の起こした爆発で王国軍は將軍もろともほぼ壊滅してしまつたのだ。そのおかげで魔王の居城に追つてはむかつていない。魔王はかろうじて一命を取り留めて、現在療養中である。

「ああ、あれな。あれには俺自身が一番びっくりだったぜ。てゆーかショックだったな」

「どういふことですか？」

ミントも気になるようだ。まったく、これで勇者様の武勇伝がまた

増えてしまった。

「あの聖剣、姫にもらった奴だったんだが、実は超強力爆弾だったんだ」

「「!!?」」

楓太もミントも訳が分からないというような表情だった。

「あの聖剣は、魔王と戦う時まで抜くと言われていた。なぜだったのか?・・・それは俺が魔王の前で、剣を抜くと仕掛けが発動してオレも魔王もろとも爆発して吹っ飛ばしてしまおう、っていう作戦だったんだよ。・・・まあ、結局失敗しちゃったがな」

そう。勇者様は魔王の前では剣を抜かず、逆に王国軍の目の前で抜いてしまったのだ。姫は聖剣のことを知られるわけにはいかないだろう。自身の策のせいで軍を壊滅させてしまったのだから。

「姫のこと、信じてたのにな・・・」

勇者様はそうつぶやいた。松明の光が揺らいだせいだろうか。勇者様の眼元が光ったような・・・。

「・・・おい、衛兵!」

ふいに勇者様が牢の外にいる衛兵に向かって呼びかけた。懷に手を突っ込んで一通の手紙を取り出した。いつ書いたんだ?

「なんですか、勇者さ・・・なんだ、罪人」

牢に近づいてきた衛兵は勇者様に吠えるように言った。

「この手紙を姫様に届けてくれないか？大切な手紙なんだ」

明らかに怪しい。あまりにもあからさまに怪しい。衛兵もそう思っ
て躊躇しているようだ。

「いや、しかし罪人が外部に手紙など・・・」

「俺は勇者だぞ」

凄味のある声で勇者様が言うと衛兵はびくつとしたようで、勇者様
の手から手紙をもぎ取るようにして預かり、走り去っていった。

「お姫様に手紙ですか？いったいどういった内容なんですか？」

ミントは不思議そうに聞いた。楓太も同じことを疑問に思った。

「ラブレターだ」

勇者様は嘘をついた。

手紙を渡してから一時間ほどした後、慌ただしい音とともに先ほど
の衛兵がやってきた。

「勇者様！釈放ですよ！」

「そうか、サンキュー」

どっこいしょ、と立ち上がった勇者様。楓太もミントも訳の分からないままに立ちあがって牢を出た。
牢を出たミントは早速衛兵に、

「ねえ、私の私物はどこにあるのでしょうか？」

「私物、ですか？」

衛兵に心当たりはなさそうだ。

「袋いっぱいのお宝はどこにあるのか、と聞いているのですけれど？」

「あ、あわかりました！すぐに案内します！」

ミントも美しさと言葉の裏に隠された恐ろしさに気が付いた衛兵はそそくさと退散した。

「ご主人様、これでお別れですね。財宝をどうもありがとうございました」

「いやいや、あんくらいなんでもないさ」

「僕は！？最後まで無視するんですか！？しかもあの財産勇者様のじゃないでしょー！」

なにが「なんでもないさ」だ。偉そうに！

「楓太さんも、お疲れ様でした。・・・対して役には立ちませんで

したけど」

「最後まで棘があるなー！・・・でもそんなミントは最高のメイドだったよ！大好きだ！」

楓太の告白を無視して衛兵の後を追っていった。

勇者様と楓太は姫様と巫女のいる塔へと案内された。

バカと姫様（2）

塔の中はいたってシンプルだった。白い石造りの塔の中は神殿のようになっいて天井が天井知らずに高かった。その中央の椅子に若い女性、おそらく姫様とその横に巫女が立っていた。

「・・・勇者様、よくもあんな手紙を送りつけましたね。仮にも私は兄上を亡くしているというのに」

姫様は怒ったように言った。どうやら楓太が灰にしてしまった王子は姫様の兄だったようだ。

「そんなこと知るかよ。あんたが浅はかだったんだろ。取引は守ってもらうぜ」

「取引って？」

楓太はまったく何も真つ新に事情を知らない。誰か教えてほしいんですけど。

「その勇者様の仮面をかぶった悪魔が私にとんでもない手紙を送ったのです。・・・俺と取引をしてもらう。こちらの出す条件は、楓太をもとの世界に還すこと、ミントに財宝をすべて受け渡すこと、今後一切俺に関わらないということ。こちらの飲み込む条件は、姫様が仕掛けた聖剣型爆弾によって將軍を含む多くの王国兵士が命を落としたことを誰にも話さない、ということ。色よい返事を待つてるぜ」・・・だそうです。なんとも卑劣な内容です」

姫様は手紙をくしゃくしゃに丸めて冷たい床に投げ捨てた。その目には憎しみの炎が灯っているようだった。

「私を脅すわけですね？魔王の討伐をお願いしたこの私を？一国の姫であるこの私を？」

「そう。そして、脅しに屈して俺たちを釈放した、だろう？」

勇者様は容赦なく言い放った。

「ええわかりました。その秘密を離されてはかなわないですからね。・・・巫女さん、お願いね」

「かしこまりました」

姫様の横に立っていた巫女がそつと楓太を手招きした。そこでようやく楓太は事態を悟った。

「勇者様！僕が別の世界の人間だって気づいてたの！？」

「ああ、まあな。ついでお前が一人目の勇者だってこともな」

勇者様は何でもないだろとでもいうように言った。

「いつ気づいたのさ」

「お前と出会った次の日？てゆーか出会った日の夜だな。・・・お前のリュックから一通の手紙がはみ出してたんだ。悪いとか一切思わずに内容を読んでみると巫女からの手紙だったというわけだ」

「勝手に人の手紙見て！少しは悪いと思えよ！」

楓太は怒った。勇者様は少しも悪びれていない。

「別にそんなこといいだろ？とりあえずこれでお前は元の世界に帰れるんだから」

「えっ・・・勇者様は？」

勇者様だつて別の世界から来たんじゃないのか？来たんだろ。

「俺は・・・別にいい。自分の名前とか、もう全然覚えてないし。今更戻つても苦労するだけだし」

「そんな・・・」

僕だけ戻るのか？

自分の名前を呼んでももらえず、

そしてついに、

自分の名前を忘れてしまった勇者様。

魔王との戦いを避け、

やり直すチャンスを与え、

世界に本当の平和をもたらした勇者様。

僕なんかよりずっと、

勇者らしかった勇者様。

「ほら、早く行けよ。巫女が待ちくたびれちまうぞ」

勇者様が楓太の背中を押した。ふらふらとした足取りで巫女の向かった部屋に入る。

部屋の中央には巨大な魔方陣。その魔方陣のわきに巫女は立っていた。楓太よりも年下。まだあどけなさの抜けないその巫女は楓太をじっと見つめていた。

「・・・久しぶりですねー。死んだかと思いましたー」

「ひどい巫女だな」

もつと優しい巫女が良かったな。

「最初に出会った時のこと覚えてますかー？」

「ああ覚えてるよ。僕が学校に遅れそうなのにトイレに長く籠っていたら、いきなり便器の中に吸い込まれて・・・この部屋にいた。そして君に出会った」

「私としてはもっとイケメンの勇者を召喚したかったんですけど、まだまだ見習いで・・・」

「僕に対して失礼だろ」

お互いの顔を見合わせてプツと吹き出した。

「それではそろそろー、向こうに送りますー」

「ちょっと待つてくれ。・・・この指輪を勇者様に渡してくれ」

楓太は真紅の指輪を指から外して、巫女の手押し付けた。

「私に渡していいんですかー？直接渡さなくてー・・・」

「いいんだ。・・・行こう」

そう言つて楓太は魔方陣の中心に立った。巫女は小さくため息をついて目を閉じた。そして呪文の詠唱を始める。

「・・・・・・・・」

勇者様、体には気を付けて。

楓太の身体は白い光に包まれて、そして、

この世界から消えた。

勇者様と指輪

「勇者様―、楓太さんからの預かりものです―」

「なんだと？」

心底意外そうな顔をする勇者様。

巫女はそつと勇者様の手のひらに深紅の指輪を手渡した。

「・・・」

ああ、まったく、

後始末を俺に押し付けたわけか。

ルビーの奴、泣き喚くだろうな。

楓太のこと結構好いてたし。

「・・・・・・・・・・？」

「どうかしましたかー？」

「いや、なるほど、と思ってな」

勇者様は真紅の指輪をじっと見つめて頬を緩めた。

そしてその指輪を自分の右手の人差し指にはめた。

「おい巫女さん、姫様に俺の部屋を用意するように言っといてくれないか？・・・なにせ金がないんでね」

「わかりましたー」

巫女が塔から出るのに続いて勇者様も塔を出た。

「・・・お前が名付け親なんて、俺最大の汚点だな」

そう呟いて右手の指輪を見つめながら歩く。

「でもまあ、バカの割にはよく考えた方かな」

勇者様は歩く。

リングの裏側に刻まれていた、

新たな名を携えて。

『Y U S Y A（勇者）』の五文字を並び替えた、

『S Y U Y A^{シユヤ}』という名を携えて。

バカが必死に考えた精一杯の名を携えて、

勇者・シユヤ様は歩く。

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2745s/>

バカ以上天才未満の魔術師

2011年5月7日20時19分発行